

# 横山重関係史料 解説

渡辺美季

はじめに

法政大学沖縄文化研究所（以下、沖文研）には、文献学者・古典籍蒐集家として知られる横山重（一八九六～一九八〇）が、一九七三年から一九七六年にかけて寄贈した琉球関係史料が所蔵されている。横山は自らの蔵書を郷里長野の赤木山<sup>1</sup>にちなんで赤木文庫と命名しており<sup>2</sup>、これらの史料も赤木文庫内の琉球史料という意味で赤木文庫と総称されてきた。長く沖文研の所長を勤めた外間守善<sup>ほがましゆぜん</sup>によれば、はじめに『琉球神道記』<sup>しんどうき</sup>など刊本・古写本を中心とした七種一八冊が入り、その後、『法條』ほか五九種の書写史料が収蔵されたという「外間一九八三、一頁」。その内訳は、沖文研に事務文書として保管されている「赤木文庫琉球資料目録 横山重氏蔵」（作成年代不明）「表一」の示す通りであったと考えられる。ただし現在の赤木文庫本と対照すると、欠本が二点あるほか、目録に記載されていない史料が五点ある「表二」。後者の内の一点は、横山が逝去した後に夫人から寄贈された『歴代寶案』の古写本（横山70）であるが、それ以外の史料については、目録の誤りか、目録作成後に新たに寄贈されたものか、判然としない。他方で、沖文研には「琉球古文書」として分類されている史料三一点がある「表三」。所蔵の来歴も横山との直接的な関係も不明だが<sup>3</sup>、その内の一二点が赤木文庫本と重複することなどから、横山と深く関わる史料であると推定できる。このため沖文研では、この度、赤木文庫と琉球古文書をあわせて「横山重関係史料」とし、解説を付した目録を作成することにした。

刊本	和装		
1	琉球神道記 三冊	(横山1)	
2	混効験集 乾坤二冊	(横山2)	
3	中山詩文集 二冊	(横山3)	
4	琉球詩録并詩課 二冊	(横山4)	
5	御蔵本目録(尚家蔵書) 一、二、三、四、五	(横山5)	
6	(昭和四年目録刊行後ノ) 郷土史料目録	(横山6)	
7	琉球官話集 三種	(横山7-9)	
以上 7種18冊			

[表2] 目録に記載されていない史料

1	南鳶志	(横山17)	○
2	隋書四夷伝地理攷證	(横山67)	原○
3	中山花木圖 [絵巻]	(横山69)	
4	歴代寶案 [古写本]	(横山70)	
5	陳侃使録訓讀	(横山71)	原

[表3] 琉球古文書

1	琉球国中山王府官制	(横山72)	
2	中山王府相卿傳職年譜 (底本)	(横山73)	
3	中山王府相卿傳職年譜 (異本) 一異本王代記附卷一	(横山74)	
4	位階定 久米村方御物	(横山75)	
5	職制秘覽	(横山76)	
6	御財制	(横山77)	
7	法條	(横山78)	
8	羽地家家之傳物語	(横山79)	
9	佐銘川大主由来記 佐敷間切	(横山80)	
10	よきやのろくもい日記	(横山81)	
11	大湾のろくもい代合之時日記	(横山82)	
12	各間切のろくもいのおもり	(横山83)	
13	君南風之始相傳記	(横山84)	
14	麻姓家譜 田名親雲上	(横山85)	
15	蔡温之自叙傳	(横山86)	
16	異本毛姓由来記	(横山87)	
17	毛氏先祖由来傳	(横山88)	
18	毛氏安里大親由来記 伊野波誌	(横山89)	
19	唐人江萬問答并晴様之條々	(横山90)	
20	大和江御使者記	(横山91)	
21	咸豊元年異国日記	(横山92)	
22	道光六年唐物方日記	(横山93)	
23	道光七年唐物方日記	(横山94)	
24	道光九年唐物方日記	(横山95)	
25	道光一六年唐物方日記	(横山96)	
26	琉球往来	(横山97)	
27	親見世舊記抜萃	(横山98)	
28	指南廣義	(横山99)	
29	琉球史料總目録	(横山100)	
30	琉球藩處分方法	(横山101)	
31	琉球漆器考	(横山102)	

【備考】

- ・原 = 原稿用紙に書き起こされている
  - ・○ = 球陽研究会「赤木文庫目録」(『球陽研究』一)に掲載されている ※注40参照
  - ・南 = 南城市に複製本の所蔵が確認できる
  - ・県 = 沖縄県立図書館に複製本の所蔵が確認できる  
(二重下線は複製本からのコピー本と推測される)
  - ・墨がけ = 赤木文庫と重複している
- (\* = 43巻のみ、\*\* = 「伊藝弘氏寄贈」印がある、\*\*\* = 7. 王代記も含む)

[表1] 赤木文庫琉球資料目録 横山重氏蔵

(沖文研事務文書)	(本目録番号)	(備考参照)
1 夏子陽使琉球録	(横山10)	○
2 中山王府相卿傳職年譜	(横山20)	原○南
3 琉球雑話	(横山21)	原○
4 通航一覽續編 琉球国之物	(横山11)	○
5 琉球入学見聞録	(横山22)	原○
6 球陽5、6、7	(横山23)	原○
7 王代記	(横山12)	○南
8 續琉球国史畧	(横山24)	原○南
9 大島筆記	(横山25)	原○
10 使琉球録 ※李鼎元	(横山26)	原○
11 陳侃使録	(横山27)	原○
12 南聘紀考	(横山13)	○
13 琉球・中国・日本・朝鮮 年代対照表	(横山68)	
14 朝鮮琉球書翰	(横山28)	原○
15 使琉球録 ※張学礼	(横山29)	原○
16 歴代宝案12冊	(横山19)	○ 県*
17 續琉球国志畧	(横山14)	○
18 琉球国志畧	(横山30)	原○南
19 陳侃使録	(横山31)	原○
20 南島誌 ※大島	(横山32)	原○ 県
21 琉球説略	(横山33)	原○南
22 琉球形勢略	(横山34)	原○南
23 琉球朝貢考	(横山35)	原○
24 琉球向歸日本辨	(横山36)	原○南
25 海東諸国紀 琉球国紀	(横山37)	原○南
26 虬陽雜録	(横山38)	原○南
27 喜安日記	(横山15)	○
28 諸寺重修記并造改諸僧縁由記	(横山39)	○南
29 琉球聘使記	(横山40)	原○
30 琉球年代記 付録 琉球雑話	(横山41)	原○
31 使琉球雑録 ※汪楫	(横山42)	原○
32 大島日記	(横山43)	原○
33 南島紀事	(横山18)	○
34 位階定	(横山44)	原○南
35 大湾のろくもい代之時日記	(横山45)	原○
36 蔡温自叙傳	(横山46)	原○南
37 那覇由来記	(横山47)	原○
38 職制秘覽	(横山48)	原○
39 中山見聞辨異	(横山49)	原○南
40 琉球実録	(横山50)	原○
41 中山国竝大嶋徳の島永良部島喜界島責取日記	(横山51)	原○南 県
42 中山物産品目	(横山52)	原○
43 法條	(横山53)	原○南
44 喜安日記	(横山54)	原○
45 使琉球録 ※陳侃	(横山55)	原○
46 毛氏安里大親由来書	(横山56)	原○南 県
47 毛氏先祖由来傳	(横山57)	原○ 県
48 異本毛姓由来記	(横山58)	原○ 県
49 中山国并大嶋徳の島永良部島喜界島責取日記	(横山16)	○ 県
50 唐人江萬問答竝様之條々	[欠本]	原 県
51 聞得大君加那志御新下日記	(横山59)	原○
52 君南風之始相傳記	(横山60)	原○
53 琉客談記	(横山61)	原○南
54 八社縁起由来	(横山62-63)	原○
55 琉球国郷村帳	(横山64)	原○南
56 諸間切のろくもいのおもり	(横山65)	原○ 県**
57 遺老説傳	(横山66)	原○ 県
58 海東諸国紀 琉球国	欠本	
59 第二異本 王代記	(横山12)***	
以上 文献資料59点		

## 一 横山重と『琉球神道集』

横山重は、一八九六年（明治二九）に長野県東筑摩郡片丘村（塩尻市片丘）に生まれ、一九二二年に慶應義塾大学文学部を卒業すると、二四年より同大学文科予科の教員となった。やがて一九三三年（昭和八）頃から数年間、琉球関係の史料収集・校訂を集中的に行うことになる。

横山によれば、そのきっかけは一九二六年、教職のかたわら、友人が始めた大岡山書店という出版社の賛助者となったことであつた。まもなく友人の遁走によって横山が経営を担うようになったものの、書店は欠損を重ねたため、次のような打開策が講じられたという。

これではいけないと私も思ひ、二三の先輩も私に忠告してくれた。その中で、宮地（直一）<sup>4</sup> 博士が一ばん積極的であつた。博士はわたしに学問上の為事を与へて、それに専念せしめ、出版書店の方は他の有能な人に任せよと言はれた。わたしもそれに従ひたいと考へた。その第一歩として、博士はわたしに「神道集」の校訂を命じられたのである。神道集ならば博士がわたしに与へ得る便宜が多いとされたのである。「横山一九七二a、一〜二頁」

『神道集』は一四世紀後半頃の成立とされる説話集だが、横山は一九二八（または一九三〇）年<sup>5</sup>に宮地の案内でその写本を初めて見ると「これはやり甲斐のある本と感じた」ため「同前、二頁」、以後、精力的にその諸本の収集・校合・定本作りに取り組んだ。

その過程で、一九三三年（昭和八）頃、横山は『琉球神道記』に着目した。これは奥州菊多郡岩岡（福島県いわき市）出身の浄土僧袋中（一五五二〜一六三九）が、一六〇三〜〇六年に琉球に滞在した際に執筆した書物であるが、そのなかに『神道集』が相当反映されていることに気づいたのである。横山は「自分がこの本の名を知ったのは十何年も前である。それなのに、最近（一九三三年）まで、この本を見ないでしまったのは、今更ながら自分の怠慢であつた」と自省し「横山一九七八、七四頁」、ちょうど『神道集』の校訂作業が一時的に停滞していたこともあって、先に『琉球神道

記」の校訂を行い、袋中の伝記・著述目録を作ることにした「横山一九七二a、三〜四頁」。

## 二 琉球関係史料の収集

一九三三年、『琉球神道記』の校訂に着手した横山は、並行して「何でも沖繩のものをあつめて、筆写専門の方々に託した」という「横山一九七二a、七頁」。その理由は「今度は、これ（『琉球神道記』）のなかで解説をする場合に、琉球史料を見なくちゃいけない」「横山一九七二b、一六二頁」と感じたためであった。後に沖文研に所蔵される横山重関係史料の大半はこうして収集されることになる。

### (一) 旧沖縄県立沖縄図書館からの書写・収集

横山は、まず旧沖縄県立沖縄図書館（以下、旧沖縄図書館）に「然るべき本の副本の作製」を依頼した「横山一九七二a、七頁」。これには、当時、東京の中野に住んでいた沖繩研究者伊波普猷い は ぷ けんの協力があつたものと推測される。伊波は、一九一〇年（明治四三）に開館した旧沖縄図書館の初代館長として郷土史料の収集に尽力し、一九二四年（大正一三）に館長を辞任して上京していた。横山は「本書（『琉球神道記』）の中に出ている、琉球の言葉が、私たちには分からなかった。私は、永年御無沙汰していた伊波普猷氏を訪ねて、御教示を得た。同氏からは、その他、得る所が多かった」<sup>7</sup>。「横山一九七八、七八頁」、「わたしは数十回にわたつて、伊波普猷先生宅へ赴いて、先生の御教示を受けた」<sup>7</sup>。「横山一九七二a、九頁」と記しており、知り合つた経緯は不明ながらも、『琉球神道記』の校訂中はかなり頻繁に伊波と接していたとみられる。そのなかで旧沖縄図書館からの書写・収集に対する支援もなされたようだ。例えば赤木文庫の『諸寺重修記并造改諸僧縁由記』（横山39）には、旧沖縄図書館の「新模本」を伊波に頼んで借覧・書写したという添え書きがあり、横山のエッセイにも伊波に旧沖縄図書館の蔵書について尋ねたという記述<sup>7</sup>。などが確認できる。一方で横山は伊波から直接史料を借覧・書写することもあつた<sup>7</sup>。旧沖縄図書館は伊波の蔵書の写本も所蔵していたため、横山重関係史料には伊波蔵本・旧沖縄図書館蔵本のどちらから写したのか特定できないものもある。

旧沖繩図書館にはまた他機関から書写・収集した史料もあった。例えば赤木文庫の『通航一覽續編 琉球國之部』（横山11）には、巻末に「本書ハ内閣文庫藏書第二七二三九號ヨリ寫ス／大正五年（一九一六）六月二日」とあり、旧沖繩図書館には、内閣文庫の蔵本を一九一六年——当時は伊波が館長であった——に書写したものが所蔵されていたと推定できる。旧沖繩図書館の蔵書は一九四五年の沖繩戦にてほぼ灰燼に帰したが、横山の書写・収集によって、その蔵書（の写本）のみならず、蔵書の成り立ちや性質を知る手がかりまでもが残されたのである。

赤木文庫本の大半は「横山重用」「大岡山書店製」などの原稿用紙に書き起こされており、しばしば「筆 高橋／校長井」などの形で書写・校合の担当者（の姓）が記されている。これは横山の雇ったスタッフ（後述）であるが、管見の限りで横山もスタッフも当時沖繩に赴いた形跡はない。恐らく、横山は、今、我々がコピーを取り寄せるように、一枚幾らという形で旧沖繩図書館に書写を依頼し、それらが郵送で届くと、スタッフが原稿用紙へと書き起こしたものと考えられる。翻って赤木文庫を見てみると、無地の白紙に墨書またはペン書きされた史料（かつ旧沖繩図書館の目録に書名のあるもの）が九点ほど含まれており、これら（ないしはその一部）が沖繩で作成された書写本に該当するものと考えられる。

ではその他の書写本はどこへ行ってしまったのだろうか。ここで浮上してくるのが「琉球古文書」として所蔵されている来歴不明の史料群である。そのうち刊本などを除いた二九点は、全て同じ装丁で、同じ規格の無地の白紙に墨書で謄写されている。装丁は比較的新しい時期になされたようだが、用紙には綴じ直した跡が確認でき、かつては別の線装本であったことがうかがえる。また用紙は赤木文庫の書写本とも類似している<sup>10</sup>。いずれの史料も旧沖繩図書館の目録に書名があり、内一三点は原稿用紙に書き起こされて赤木文庫にも収録されている。こうしたことから、この二九点も沖繩で作成された書写本そのものであると推測できる。横山は出版計画などを背景に、沖繩から取り寄せた史料の一部を選択的に原稿化していたのかもしれない。

こうして旧沖繩図書館から収集された史料のなかには、『羽地家家之傳物語』（横山79）・『唐人江萬問答并晴様之條々』（横山90）・『唐物方日記』五冊（横山92～96）・『親見世舊記拔萃』（横山98）といった王国時代の史料のみならず、『昭和四年目録刊行後ノ』郷土史料目録』（横山6）・『八社縁起由来』二冊（横山62～63）・『琉球史料總目録』（横山100）と



いった近代史料など、横山重関係史料にしか残存が確認できないものが含まれている<sup>11</sup>。

## (二)『歴代宝案』の書写・収集

旧沖縄図書館からの史料収集と同時に、横山は翁長氏おながなる人物<sup>12</sup>に乞うて、琉球の外交文書集『歴代宝案』の「影写方」をも依頼している。「横山一九七二a、七頁」。『歴代宝案』の正本は一八七九年（明治一二）に明治政府に接収され、一九二三年（大正一二）の関東大震災にて失われていたが、一九三二年（昭和六）に久米村（那覇市久米）で副本が確認され、三三年一月に旧沖縄図書館に移管されていた。『歴代宝案』の清書代は一枚八錢で、横山は「東京だったら十五錢や二十錢は払わなければいけないのに、沖縄は安いな、向こうの清書料」と述べている。「横山一九七二b、一五九頁」。『歴代宝案』の写本は二年間<sup>13</sup>に百冊余りが届き、「その中には」袋中記事も琉球神道記の記事もなかったが、何かの役に立つと考へて、沖縄出身の史学者なる東恩納寛惇氏ひがしおん かんじゅん（当時武蔵野高校教授）に校訂方を依頼した」という「横山一九七二a、七頁」。なお東恩納と横山は、伊波の紹介により一九三五年二月に東京で知り合っている<sup>14</sup>。

横山が東恩納に預けたのは『歴代宝案』第一集の全四三巻四三冊であったとみられ、残りは横山が所持していたが一九四五年五月二六日の東京大空襲の際に焼失した「一九七二b、一五九〜一六〇頁」。しかし時期は不明だが、東恩納保管分のうち、校訂を済ませた一三冊が横山のところへ戻り<sup>15</sup>、それらは赤木文庫に入っている（横山19）。一方、他の三〇冊はそのまま東恩納のもとに残り、現在は沖縄県立図書館東恩納寛惇文庫に所蔵されている。横山写本と東恩納写本は一冊（巻二四）が重複しており、横山写本の方には鉛筆で「不用」と記した後、ペンで「必用」と上書きされている。重複して筆写したために、はじめ不要と判断したものの、後で何らかの理由で撤回したのであろう。

これらの写本は、全て版心に「歴代寶案」あるいは「歴代寶案／卷之／久米村」とある油印黒罫紙が用いられている。なお一九三三年から三七・三八年にかけて旧沖縄図書館が作成した「一般研究者の閲覧」用の写本が部分的に残存しており（那覇市歴史博物館蔵）、横山写本と同タイプの罫紙は、一九三四年一月〜三五年二月に筆写・校合された簿冊に用いられているという「川島二〇一三、二二頁」。このことから横山写本の作成もほぼ同じ時期になされたものと考えられる。

旧沖縄図書館の『歴代宝案』の副本や「一般研究者の閲覧」用の写本は、沖縄戦に伴い北部の羽地村源河（名護市字源河）に疎開したが、当地も空襲に遭い、写本の一部のみを残して焼失した「城間一九五八、四頁」。従って現在、横山写本（東恩納写本を含む）は、在りし日に部分撮影された影印本や他の写本類と補い合せて、『歴代宝案』原本（正本・副本）の「欠」を埋める貴重な存在となっている。なお前述したように横山も東京大空襲で被災していた<sup>16</sup>。この時、蔵書の八割方が失われたが、一部を疎開させており、幸いにも後に沖文研に寄贈された史料類はそのなかに含まれていたのである。「原一九九四、三頁」。ただし赤木文庫に入った『歴代宝案』写本一三冊については、疎開させていたのか、空襲後に東恩納から返却されたのか、判然としない。

### (三) 尚家蔵書の書写・収集

驚くべきことに、横山はさらに琉球の王家である尚家の蔵書まで借覧・書写している。横山によれば、一九三三年（昭和八）に別件で柳宗悦やなぎむねたけの訪問を受けた際に、たまたま「沖縄図書館の人の手紙によると、首里の尚男爵家の倉庫には、王家の御側御本があるらしいが、これらは到底、手の及ばぬ高嶺の花のやうです」と話したところ、柳が「学習院時代に、尚侯爵君とは交際があつたから、わたしから頼んで見る、できたら東京へ送つて貰はう」と応じたという「横山一九七二a、七」。尚侯爵とは最後の国王尚泰の嫡孫尚昌しやうしやうのことだが、一九二三年に他界していたため、横山は柳がその未亡人に電話をしたのではないかと推し量っている。

やがて柳から、当時渋谷の南平台にあった尚家邸に本が到着したという連絡があり、横山は一九三五年（昭和一〇）四月から数名の人員とともに二ヶ月ほど毎日通つて書写・校合・再校を行った「横山一九七八、九五頁」。しかしそれは時間がかかり、尚家にも心苦しいことから、尚家の許可を得て横山の自宅に百余冊を借り出し、より多くの人數で作業を進めることにした。これについて横山は次のように記している。

わたしは書写専門の方々たにこれを託しま、交互に校合せしめた。そして、訓点をつけ、返点をつける作業は、わたし方の全員で分担した。わかりにくいところは、外部の専門家についた。そして各種の原稿は、即時に印刷所に



まして、活字校正を行なった。かうして、琉球国由来記や、琉球国旧記や、中山世譜、中山世譜附卷など、数年後に紙型を貸与して刊行せしめた「琉球史料叢書」五冊に収めた全部の中から、袋中の記事、神道記の記事を取つて、これを「琉球神道記」の解題の中へ入れた。

また、琉球国の国民史とも言ふべき「球陽」は、活字校正に及ばず、原稿として保存したが、その中にある神道記の記事も、わたしの解題の中へ入れた。この「球陽」のうつしは、戦後、沖繩の球陽研究グループに寄贈した。

……かうして、尚侯爵家から拝借した百余巻は、割合に早く卒業して、一年有余で尚家へお返しすることができた。その本が沖繩へ送られ、首里で〔沖繩戦によって〕罹災した〔横山一九七二a、八頁〕。

ここに見られる首里王府編纂の地誌『琉球国由来記』・『琉球国旧記』、正史『中山世譜』（蔡温本）・『中山世譜附卷』（同前）の四点について、横山は「神道集の延長としての『琉球神道記』からは離して、全く別の叢書として行くつもりであつた」と述べており〔横山一九七二a、九頁〕、さらに『球陽』の翻刻刊行も構想していた。後に横山は「私どもは全部来たなかでもより好みをしましてね。そんなに写し切れないです、多量で」と語っているが〔横山一九七二b、一五六頁〕、史料の書写は出版計画などに沿って選択的に行われていたようである。

一九三六年（昭和一一）、横山はついに『琉球神道記』を含む袋中の一連の著作を校訂収録した『琉球神道記』（弁蓮社袋中集）を大岡山書店から刊行したが、その時点で先の四点の紙型はすでに完成していた。この四点は、王国初の正史『中山世鑑』（内閣文庫蔵本）<sup>18</sup>を加えて、一九四〇～四二年（昭和一五～一七）に『琉球史料叢書』五冊として名取書店<sup>19</sup>から翻刻刊行されている（伊波普猷・東恩納寛惇との共編）。「日支事変が膠着状態になつて久しく、すでに印刷用紙さへ乏しかつた」なかでの刊行であつた〔横山一九七二a、一〇頁〕。

一方で、『球陽』は、経済的な理由もあり原稿のまま長く保存されていた。しかし戦後の一九六八年、外間守善らの斡旋によつて、沖繩で『球陽』の復刻に取り組んでいた研究グループ（球陽研究会）に提供された〔球陽研究会一九七四、六～七頁〕。後述するが、外間はその少し前に横山と知り合つていたのである。やがて一九七四年——沖繩の本土復帰の二年後——、横山の原稿を主な底本として『球陽』の原文編・読み下し編が角川書店から刊行された。なお

横山の原稿は、現在、赤木文庫にある（横山23）。

ところで戦前、尚家の蔵書は沖繩邸（の中城御殿）と東京邸に分蔵されていた。後者の一九二〇年（大正九）の蔵書目録<sup>20</sup>には、すでに『球陽』・『中山世譜』（蔡温本）・『中山世譜附卷』（同前）・『琉球国』旧記』の書名が見える。ということとは、横山の調査時（一九三五年）には、これらの史料はすでに東京邸にあり、横山はそれを写したのではないだろうか。なお東京邸の蔵書は戦火を免れて残存し、現在、那覇市歴史博物館に所蔵されているが（二〇〇六年国宝指定）、その中にも先の四書は含まれている。これらは写本（副本）であり、正本は沖繩邸が所蔵していたとみられる——少なくとも『中山世譜』（蔡温本）の正本はあった<sup>21</sup>——ことから、沖繩から正本が届けられ、それを横山が写した可能性も否定できない。また『琉球国由来記』については、横山が「（尚家に通っていた）ある日、電話が来た。待望の「由来記」が沖繩の尚家から届いたという報知であった」と述べていることから「横山一九七八、九六頁」、間違いない沖繩から送付されたものと考えられる。この書籍は沖繩邸に送り返され、他の蔵書の大半とともに沖繩戦で失われたようだ。ちなみに横山は自らの『琉球国由来記』写本原本について「いまはもうないです。……〔東京大空襲の際に〕氷川町〔板橋区氷川町〕のうちで焼けたんでしょうね」と回想している「横山一九七二b、一六二頁」。

ほかに赤木文庫には『御藏本目録（尚侯爵家）』（横山5）もある。尚家（沖繩・東京）の蔵書目録だが、その構成は残存している他の蔵書目録類のいずれとも異なっている。横山は「あれは尚家から見せてもらったものかな。ちよつとそこがわからないんです。なぜあれが私のところに残ったのか」と述べており「横山一九七二b、一五七頁」、具体的などころは不明だが、尚家蔵書を書写した時期に「既存の目録」・「沖繩尚家の所蔵史料」・「東京尚家に届けられた史料」などをもとに作成・書写された可能性が指摘されている「堀口二〇〇二、四六頁」。

#### （四）本土における書写・収集

横山は、東京を中心とした本土各地の諸機関や個人の蔵書からも琉球関係史料を書写・収集した。赤木文庫本を見ると、『使琉球紀』（横山29）に「上野（旧上野図書館）」、『使琉球録』（横山55）に「上野図書館二〇三—三」、「南島誌大嶋」（横山32）に「東大図書館蔵本」、「那覇由来記」（横山47）に「岩瀬文庫蔵」、「琉球國郷村帳」（横山64）に「島

津家所土／琉球國郷村帳／（無窮会蔵本）、および『朝鮮琉球書翰』（横山28）に「黒川真頼蔵書」、『海東諸國紀 琉球國紀』（横山37）に「右一卷以深尾氏蔵本謄／寫」との記載があり、それぞれ旧上野図書館（帝國図書館）・東京帝国大学附属図書館・岩瀬文庫<sup>22</sup>・無窮会・黒川真頼・深尾氏（不詳）の蔵書から書写されたことがわかる。加えて既刊書も利用された。『琉客談記』（横山61）には「無窮会本／琉客談記／三十幅／写 日比野／史籍集覽引合 長井」との記載があり、無窮会本を写した上で、『史籍集覽』（一八八一～八五年刊行）を用いて照合したことがわかる。

横山は古典籍市場においても琉球関係の刊本や古写本を探した。はじめは袋中関係の史料を集めたとみられ、赤木文庫にある『琉球神道記』の刊本（横山1）を、一九三三年に巖松堂から購入している。また同じ頃、「川北文庫（丹波（丹羽）修治）の蔵印のある、袋中の作「琉球往来」という写本を買った」というが「横山一九七八、四二二頁」、後に手放したとみられ、現在は筑波大学附属図書館に所蔵されている。

琉球関係の古典籍については、琉球史料の書写・収集のピーク時（一九三三～三六年頃）にはあまり市場に出なかつたのか、管見の限りで購入が確認できるのは一九三八年（昭和一三）からである。この年の五月、横山はまず弘文荘から一八〇円で売りに出された『歴代宝案』の写本を購入した。これは琉球の対清外交に従事した久米村の鄭崇基（一七五八～一八二八年）が簡便な先例集として編んだもので、「鄭良弼（崇基の息子）／敦厚堂／藏珍」の印記がある。「池谷・内田二〇一三」。その市場への出現は「折口（信夫）博士、栗田（元次）・秋山（謙蔵）両教授、東洋文庫、横山（重）氏等の買手を殺到せしめて、学界にセンセーションを巻き起した」というが「安里一九四一、五一五頁」、横山は朝七時に弘文荘の販売目録（『弘文荘待買古書目』第一一号）が届くと、七時半には弘文荘へ到着し、一番乗りでこれを買上げた。後に弘文荘の店主反町茂雄は「横山さんは秀抜な資料蒐集家、鑑識力の高さ、自己の必要とする稀書獲得にかける情熱と機略とでは、前後に比を見ない学者です」と評しているが「反町一九九八、一三六頁」、本事例はその強力な証左と言えるだろう。横山はこの写本を「いい字だ。支那風の、縦長の写本で、二十冊ある。……あれが百八十円では安かった。……これこそ、私の文庫の、いちばんの逸品である」として非常に気に入っており「横山一九七八、一九五頁」、その逝去（一九八〇年）後、あい夫人（一九九一年逝去）から沖文研へ寄贈された（横山70）。

続いて同じ一九三八年の八月、国語学者上田万年の蔵書が売りに出され、その中に上田の師であった英人言語学者チェ

ンバレンが一八九三年（明治二六）に首里役所長であった西常史（にしつねあき）の蔵書から写した『混効験集』があった。横山は「私が琉球史料をあつめてから、約七年になる。私は物語類〔『室町時代物語大成』の刊行事業〕の方に専念していたから、しばらく休止していたが、この本〔『歴代宝案』〕を得て、一般的な意味では、もう峠を越えたという気がした。で、混効験集を得れば、更にそれが確実になる」と感じ、「宝案が安かった埋め合わせです。百円でも百五十円でもいいから、とにかく取ってください」と弘文荘の反町に頼んだという「横山一九七八、一九五頁」。横山の依頼を受けた反町は『混効験集』を一〇二円で落札したが、やがて（一九四一年か）<sup>23</sup>横山は巖松堂を通じて「玉城御殿御物より写」という一八八五年の写本を入手し、これが今、赤木文庫にある（横山2）。チェンバレン写本は一九四六年（昭和二一）に上野図書館へ譲渡し<sup>24</sup>、現在は国会図書館が所蔵している。

ところで『歴代寶案』写本（横山70）の購入直後、横山は弘文荘の販売目録に同時掲載されていた『琉球官話集』の古写本を買い忘れたことに気づき、すぐに電話したがすでに売っていた「横山一九七八、一八七頁」。買い手は天理大学で、現在この本は同大学図書館が所蔵している。そこには「敦厚堂」「鄭于英」<sup>25</sup>の墨書や「敦厚堂」の印記があり「宮良一九八一、一四三〜一四四頁」<sup>26</sup>、『歴代宝案』写本と同じく鄭崇基・良弼の一族である久米村の鄭姓真榮里家の旧蔵書であったことがわかる。他に早稲田大学図書館にも同じく一九三八年に購入された『琉球勅使御迎大夫日記 真榮里親方（鄭秉衡）』があり「豊見山一九九三」、この頃、真榮里家の複数の蔵書が古典籍市場に同時に売り出されたようである<sup>27</sup>。

一九四〇年（昭和一五）、弘文荘の販売目録（『弘文荘待賈古書目』第一四号）に「琉球古写本」なる『広応官話総録』<sup>28</sup>・『官話問答便語』・『琉球官話集』が掲載された。三点目の『琉球官話集』は目録一一号の官話集と同名だが違う本である<sup>29</sup>。この三冊は赤木文庫にある『廣應官話總録』（横山9）・『官話問答便語』（横山8）・『琉球二字官話集』（横山7）<sup>30</sup>であると推定され、横山が弘文荘から購入したと考えられる。すべて一九一六年（大正五）に沖繩を訪問した武藤長平（鹿児島島の旧制第七高等学校教授）が現地で手に入れた写本の一部であり、「武藤」の印記が確認できる<sup>31</sup>。武藤の旧蔵本は、一九三八年一二月刊の弘文荘の目録（『弘文荘待賈古書目』第二二号）にも三点（『球陽』・『琉球唐大和取合記』・『琉球服忌記』）掲載されており、その頃弘文荘がまとめて入手したのであろう<sup>32</sup>。なお一九六九年（昭和四四）頃、横

山は自らの官話集について、外間守善に「この共本トモの『琉球官話集』（い本「異本」）は天理にあります」と書き送っており<sup>33</sup>、かつて買い逃した『琉球官話集』をずっと意識していたようだ。

一九四一年（昭和十六）、横山は慶應義塾大学を退職して校訂事業に専念し始める。その翌年、植物学者伊藤圭介（一八〇三～一九四一年）の旧蔵本で、その息子の篤太郎の蔵書が売りに出された。横山はそこから『中山詩文集』（横山3）・『琉球詩録』、『琉球詩課』（横山4）を入手している。前者は表紙に「金則儀きんそくぎ」「多嘉良里之子親雲上たからサトメシベイチン」などの墨書があり、久米村金姓多嘉良家一七世則儀（一八三二～？）の蔵書であったことがわかる<sup>34</sup>。なお両書に付された横山によるメモに、このうちの『琉球詩課』を台北帝国大学へ売却したことが記されるが、現在、両書とも赤木文庫にあり、その経緯は判然としない。

赤木文庫唯一の絵巻『中山花木圖』模本（横山69）と旧内務省記録の写本である『琉球藩處分方法』（横山101）については、今のところ、入手に関わる手がかりを見出せていない<sup>35</sup>。

#### （五）書写・収集を担った人びと

赤木文庫本の八割弱は原稿用紙に書写されており、「長井」を最多として、「渡辺」・「高橋」・「原」・「林」・「立木」・「日比野」・「戸田」など、書写・校合を担当したスタッフの姓が確認できる。横山は「昭和八年（一九三三）に私は今の仕事をはじめた。まず人を多く集めたので、やがて手当の費用に窮してきた」と記しており「横山一九七九、四九〇頁」、『琉球神道記』に取り組んだ頃から複数のスタッフを雇用していたとみられる。若いスタッフが多かったようだが、横山が「高橋老人」と呼ぶ年長者も含まれていた「横山一九七八、一六九頁」<sup>36</sup>。横山は彼らを「協力者」・「友人」などと呼んでおり、長時間を共に過ごしながら、協力して校訂事業に当たっていた。またその夫人も「実質的に仕事の半分は手伝ってくれた」という「原一九九四、六六頁」。

スタッフのうち琉球関係史料の校訂作業を中心的に担っていたのは「長井」こと長井光美である。横山によれば、長井は慶應義塾普通部（旧制中学）を出た後、一九三三年ないしは三四年に横山のスタッフとなった<sup>37</sup>。「琉球史料をやり、室町物語をやり、古浄瑠璃をやった。私が今まで見た中で、これほど優秀な成績をあげた人はいない。『琉球神道記』



に出てくる」梵字も自ら学んだし、琉球の古語もできた。記憶のいいことは抜群であった」という「横山一九七八、二六七頁」。しかし一九三七年に発病し、入退院を繰り返したあげく、一九四〇年（昭和一五）二月には東大病院に入院してしまふ。横山は「長井光美君は、本年二十七歳、慶応普通部の出した、異常な学者だ。もし彼が、三十五歳まで生きたら、どこまで行くか。願わくば、生きよ、生きよ」「同前、二六八頁」と念じたが、その願いもむなしく、同年一月二〇日、長井は永い眠りについた。横山は「絶えず、琉球史料叢書の本になる日を待ちながら、それが本になる日を待たずに、ついに死んでしまった」「同前、三三〇頁」と嘆じている。『琉球史料叢書』第一・二冊は同年一二月に刊行されたが、少なくとも長井の臨終には間に合わなかったであろう。その第一・二冊の例言には「……活字校正は、主として、長井光美君が当つた」とあるが、一九四一〜四二年に刊行された第三〜五冊の例言には「……活字校正は、主として、故、長井光美君が当つた」と記されている。

### 三 沖文研への琉球関係史料の寄贈

一九四五年（昭和二〇）、東京大空襲で住まいを焼かれた横山は郷里（長野県片丘村）へと引き揚げ、一九六〇年（昭和三五）にはさらに愛知県犬山市へと転居した。やがて一九六七年（昭和四二）、和洋女子大学教授であった外間守善のもとに、横山から琉球関係史料の入った大きな箱が三つ送られてきた「外間二〇〇二、一六四〜一六五頁」。外間はその少し前に、角川書店社長の角川源義げんよし——横山とも外間とも親交が深かった——の紹介で横山と知り合っていたが、まだ一度会った程度だったという。

驚いた外間が横山に問い合わせると、「琉球の研究を広げてもらいたいので貴殿に押し貸しをする。気に入ったら返さなくてもよい」とのことであった。横山の史料を見た外間は「のどから手の出るくらい欲しい逸品ぞろい」と感じたが、『おもろさうし』などの研究に忙殺されて他の文献を見る余裕はないと考え、犬山へ出向いて横山に直接史料を返却した。外間によれば、横山は「欲のない人だなあ」と笑っていたというが、これをきっかけに外間と横山は親しさを増したようである。



さつそく翌六八年五月、横山は外間の依頼に応じて沖縄の球陽研究会へ『球陽』の原稿を送付し、まもなく横山の史料も同研究会が譲り受けた<sup>38</sup>。しかし分量が多かったため保管場所の問題が生じたという。一方、東京では六八年四月に法政大学文学部に異動した外間が、東京に沖縄研究の拠点を作りたいという構想を温めていた。ややあってこの構想は具体化し<sup>38</sup>、一九七二年（昭和四七）七月に法政大学沖縄文化研究所（沖文研）が創設され、外間はその副所長となった（所長には総長の中村哲が就いた）。沖文研という「場」を確保した外間は、球陽研究会に横山史料の受け入れを打診する。研究会は保管の問題や研究利用の利便性などを鑑みて打診を受け入れ、史料原本は沖文研が所蔵し、球陽研究会へは沖文研から複製本（コピー本）が提供されることになった<sup>40</sup>。こうして一九七三年から数年かけて、横山重関係史料は沖文研に収蔵されたのである。

## おわりに

「私を得た本などをちょっと申し上げると、伊波先生は、私を本集めの天才だとしばしば言われました」——一九七二年、外間との対談で横山はそう語っている「横山一九七二b、一五六頁」。一九三三～三五年を中心として驚異的な琉球関係史料の収集を行った横山の事蹟を振り返ると、伊波の言葉は核心のただなかを突いているように思われる。横山の情熱によって残されたこの貴重な史料を、沖文研は一般への閲覧に供するとともに、一部は『沖繩研究資料』として復刻してきた。しかし残念ながら史料目録は作成しておらず、このため史料の全容や個々の史料の性質やルーツなどは把握しづらい状況にあった<sup>41</sup>。本目録の刊行により、こうした状況は大いに改善されることだろう。横山の史料がこれまで以上に活用され、「琉球の研究を広めてもらいたい」という横山の想いの通り、より豊かな研究の進展に結び付いていくことを念じてやまない。

安里延『日本南方発展史 沖縄海洋発展史』三省堂、一九四一年

池谷望子・内田晶子『鄭良弼本 歴代宝案』再考『沖縄文化研究』三九、二〇一三年

- 大里知子「沖繩資料センターから法政大学沖繩文化研究所へ―中野好夫・新崎盛暉の格闘とその継承―」『沖繩文化研究』四七、二〇二〇年
- 川島淳「那覇市歴史博物館所蔵『歴代宝案』に関する史料学的考察―生成・来歴・目録記述に焦点をあてて―」『那覇市立壺屋焼物博物館紀要』一三、二〇一二年
- 木津祐子編『京都大学文学研究科蔵 琉球写本『人中晝』四卷付『百姓』臨川書店、二〇一三年
- 木津祐子「『廣應官話』と乾隆年間の琉球通事」太田齋・古屋昭弘両教授還暦記念中国語学論集刊行会『太田齋・古屋昭弘両教授還暦記念中国語学論集』好文出版、二〇一三年
- 球陽研究会編『球陽』原文編、角川書店、一九七四年
- 近藤壯「程順則着賛本『中山花木図』に関する一考察―(財)海洋博覧会記念公園管理財団所蔵本を中心に―」『沖繩文化研究』三二、二〇〇六年
- 島村幸一「赤木文庫」『文学』九一三、一九九八年
- 城間朝教「沖繩図書館の最後と復興」『琉球』七・八号、一九五八年
- 反町茂雄「一古書肆の思い出」二(平凡社ライブラリー)、平凡社、一九九八年
- 平和彦「近世琉球の官話」『宮良當壯全集月報』七『宮良當壯全集』一〇所収、第一書房、一九八二年
- 高津孝・榮野川敦編『増補琉球関係漢籍目録』(研究成果報告書別冊)二〇〇五年
- 田名真之「琉球王国と尚家」那覇市歴史博物館編『国宝』琉球国王尚家関係資料のすべて『沖繩タイムズ社、二〇〇六年
- 豊見山和行「勅使御迎大夫真榮里親方日記について」『歴代宝案研究』三・四合併号、一九九三年
- 原秋津編『横山重自伝(集録)』岩波ブックセンター、一九九四年
- 東恩納寛惇「日記抄」『東恩納寛惇全集』一〇、一九八二年、第一書房
- 外間守善『混効験集 校本と研究』角川書店、一九七〇年
- 外間守善「まえがき―尚侯爵家『御蔵本目録』について―」『御蔵本目録(尚侯爵家)』法政大学沖繩文化研究所、一九八三年
- 外間守善「沖繩研究の証言」『沖繩学への道』(岩波現代文庫)、岩波書店、二〇〇二年
- 堀口修「尚侯爵家東京邸所蔵史(資)料に関する基礎的研究―諸所蔵目録の比較検討を通して―」『古文書研究』五六、二〇〇二年
- 宮良當壯『宮良當壯全集』一〇、一九八一年
- 横山重「後記」横山重編『琉球史料叢書』五、東京美術、一九七二年 a

横山重「琉球史料をめぐって」『文学』四〇、一九七二年b  
横山重『書物搜索』上、角川書店、一九七八年  
横山重『書物搜索』下、角川書店、一九七九年  
和田久徳「『歴代宝案』第一集解説」沖縄県立図書館史料編集室編『歴代宝案校訂本』二、沖縄県教育委員会、一九九二年

- 1 塩尻市片丘の北にある赤木山か。ただし横山の印に「アカキ」という印があり、横山は「あかき」と呼んでいた可能性がある。
- 2 稀観本・善本が多いことで名高い。現在は慶應義塾大学図書館・大阪大学附属図書館・早稲田大学図書館・関西大学図書館・大阪青山大学などに比較的まとまって収蔵されている。
- 3 沖文研に保管されている過去の事務文書には「琉球古文書」の所蔵に関わる記録が見当たらない。
- 4 一八八六～一九四九年。神道学者。当時は内務省神祕局考証課長であった。
- 5 別の回想によれば、一九三〇年である「横山一九七八、五四頁」。
- 6 例えば「沖縄図書館に「琉球往来」があるけれども、それは袋中のものでないと、前館長の伊波さんが教えてくれた」という「横山一九七八、七八頁」。
- 7 例えば『宮古島旧記』に関して、「この本を私は二本得た。一つは伊波先生の本、一つは沖縄図書館の本」と記している「横山一九七八、九三～九四頁」。ただしこの写本は横山重関係史料には含まれていない。
- 8 あるいは郵送ではなく直接届けられたのかもしれない。一九三九年（昭和一四）の横山のエッセイに「三、四年前に、沖縄図書館の方が見えたので、私はいっしょに銀座のカフェーへ行った」とある「横山一九七八、二二頁」。
- 9 『使琉球録』（横山10）・『通航一覽續編 琉球國之部』（横山11）・『王代記』（横山12）・『南聘紀考』（横山13）・『續琉球國志略』（横山14）・『喜安日記』（横山15）・『中山國并大嶋徳之嶋・永良部島・喜界嶋責取日記』（横山16）・『南寫志』（横山17）・『南島紀事』（横山18）である。
- 10 前註の九点の内、『南聘紀考』（横山13）以外は用紙の分量も琉球古文書とほぼ同じである。
- 11 この他に『職制秘覽』（横山48・同76）も孤本に近い存在と見なすことができる。この史料は沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵「鎌倉芳太郎資料」（ノート五〇）にも所収されているが、その分量は横山資料の一割弱である。
- 12 不詳。琉歌・芸能研究者の鳥袋盛敏とともに『琉歌全集』（一九六八年）などを著した翁長俊郎のことか。

- 13 エッセイでは「一年半を要して、古いところを四十何冊か、影写してもらった」とある。「一九七八、一九五頁」。
- 14 東恩納は日記に、「二月廿七日 夜、大岡山書房の横山氏、伊波君の紹介にて来る。琉球史料刊行につきての相談なり、神道記一部送らる。曩に巖松堂にて十円で取りしものなり」「東恩納一九八二、四六頁」と記している。
- 15 横山は「東恩納さんも（校訂が）なかなか進行しないで、そのなかの十二冊（※実際には一三冊）だけ私のほうへ戻してくれました。それがここにあるんです」「それは東恩納さんが朱でもって、「日」の字になっているのは「いわく」という字だとかいふうちに、みんな校訂されたんです」と述べている「横山一九七二b、一五九頁」。
- 16 自宅・文庫・倉庫・書籍の修理屋が被災したという。横山は「（一九四五年）五月二十六日の暁方、私に縁のある所は、みな焼けた。……すべてが亡び去った」と記している「横山一九七九年、一〇頁」。
- 17 「当時史料編纂所に勤めている方々を四、五人知っていましたので、そういう方々に、失礼だけどみんなわたして、写せ、写せと写させたんです」「横山一九七二b、一五六頁」という。
- 18 内務省旧蔵の写本である（国立公文書館内閣文庫蔵、請求番号一七八―〇三七八）。
- 19 横山のパトロンの一人である名取和作の息子洋之助が刊行を担ったという。なお名取書店は後に岩波書店に吸収された。
- 20 鎌倉芳太郎「ノート二九 書籍目録」所収「大正九年九月改正 書籍目録」（『鎌倉芳太郎資料集（ノート篇）三』沖縄県立芸術大学附属研究所、二〇一五年）。
- 21 沖縄戦で失われたと思われる沖縄の尚家邸の蔵書（中城御殿本）のうち、正本とみられる『中山世譜』・『中山世鑑』（蔡鐸本・蔡温本）が一九五三年にアメリカから返還されている（沖縄県立博物館・美術館蔵）「田名二〇〇六、二三六頁」。
- 22 そのほか『虬陽雜録』（横山38）と『中山物産品目』（横山52）も岩瀬文庫から書写されたものと推定できる（目録本文を参照のこと）。
- 23 外間守善は「横山氏が右の書を三百円で入手したのは昭和十六年（一九四二）春とのこと」と記している「外間一九九〇、一三頁」。
- 24 沖文研の外間守善資料のなかに残る横山から外間宛の書簡（一九六九年か）に「戦後（昭和）二十一年）、上野図書館へゆづりました」とある。
- 25 鄭姓真栄里家二世鄭文華とみられる。『鄭姓家譜』（真栄里家）によれば、文華は一八五九年生まれで、字は「于英」である。この官話集を復刻した宮良當壯は、「『弘文荘待賈古書目』第一四号に稀観古写本『琉球官話集』一冊のことが掲載されてゐる。私は本書を一度見たいものだ并希望してゐた。その後、本書は天理図書館に収蔵され、門外不出の貴重図書として取扱はれるやうになつたことがわかつた」と記しているが「宮良一九八一、一四三頁」、後述するように目録一四号の『琉球官話集』は同名の

- 別の本であり、名前から思い違いをしたものと考えられる。
- 27 他に京都大学文学研究科図書館にも「敦厚堂」の印記を持つ官話集（『人中書』四冊・『百姓』一冊の合冊本）があり、一九四八年に受け入れたものという「木津二〇一三、七八八〜七九〇頁」。
- 28 『広応官話』の現存は二例しか確認されておらず、もう一方の写本（天理大学天理図書館蔵）には題名に「総録」の文字がない「木津二〇一三、一七九頁」。なお天理大学の『広応官話』には沖縄県巡査の経歴を持つ西田鉄（一八五九〜一九二二年）の蔵書印「西田／鉄印」があり、同じ印を持つ官話写本が他に五種（『人中書』二種・『百姓』・『学官話』・『官話問答便語』）所蔵されている「高津・榮野川二〇〇五、五四〜五五頁」。
- 29 目録一一号の『琉球官話集』は「紙数約八十葉」「保存大体良」であり、目録一四号の方には「紙数百十数葉。虫損や、多し」とある。
- 30 書背に「立津<sup>なつ</sup>仁屋<sup>にや</sup>記」の墨書があるが、人物は特定できない。
- 31 東京大学総合図書館にも武藤旧蔵の別の官話写本『新刻人中書』があり、目録カードの裏面に「故武藤長平氏<sup>ナガヒラ</sup>在琉球蒐集圖書之一也」とある「木津二〇一三、七八一頁」。受人印などがなく、受人時期は不明である。
- 32 同目録には他に琉球関係史料として、『中山伝信録』（明和三年刊、和刻本）・『薩琉往復文書集』（古写本）・程順則撰『雪堂遊<sup>ユ</sup>蕪草』（正徳四年、和刻本）・鄭元偉撰『東遊草』（天保一四年刊）が掲載されている。
- 33 沖文研の外間守善資料のなかに残る横山から外間宛の書簡に記されている。
- 34 天理大学図書館には「金光華」「三男多嘉良松金」という墨書がある写本『官話』が所蔵されており、金光華は金姓多嘉良家一八世（一八六五年生）である「平一九八一、三〜四頁」。
- 35 一つの可能性として、伊藤篤太郎も『中山花木図』一巻を所蔵していたことを指摘しておく。これが複数ある現存作品中に存在するか否かは不明であるという「近藤二〇〇六、一九七〜一九八頁」。
- 36 その他のスタッフのうち、「原」は原秋津、「立木」は立木朋吉（大岡山書店主）であろう。
- 37 横山は「彼は昭和八年に私宅へ来て」「横山一九七八、二六七頁」、「彼は、昭和九年に、私宅に来た」「同前、三三〇頁」と記しており、いずれの年か特定できない。
- 38 球陽研究会メンバー糸数兼治氏・富島壯英氏への聞き取りによる。聞き取りは二〇二二年一〇月に野村直美氏・外間みどり氏によって行われた。以後、球陽研究会に関する記述は全てこの聞き取りに基づいている。
- 39 直接の契機は、一九七二年四月に英文学者・評論家の中野好夫が主宰していた「沖縄資料センター」（一九六〇〜七二年）から

資料寄贈を打診されたことであった「大里二〇二〇」。

40 球陽研究会に寄贈された複製本については「赤木文庫目録（全八十冊）」（『球陽研究』一、一九七七年）がある。現在、その一部が南城市教育委員会文化課および沖縄県立図書館に所蔵されている。また沖縄県立図書館には、複製本からコピーしたとみられる史料も数点所蔵されている。

41 横山史料のうち、赤木文庫本については琉球文学者の島村幸一による概要紹介「島村一九九八」があり、史料一覧も含まれている。本稿でもこれを大いに参照している。

〔付記〕横山重関係史料の内、『琉球史料總目録』（横山100）の解説は、ご専門の立場から輝広志氏（一般財団法人沖縄美ら島財団事業部首里城事業課）にご執筆いただいた。また二〇二二年一月、本目録作成の最終段階において、横山學氏（ノートルダム清心女子大学名誉教授）より横山重旧蔵『中山世譜』『中山世譜附卷』（横山103）を法政大学沖縄文化研究所にご寄贈いただき、あわせて本史料に関わる特別寄稿もたまわった。お二人の協力を深く感謝する次第である。